

ルック記の学び

ズエル  
買い戻す者

# 目次

はじめに	.....	2
<i>Lesson1</i>	10years	
	ルツ記 1章1節～5節	3
<i>Lesson2</i>	ベツレヘムへ	
	ルツ記 1章6節～22節	5
<i>Lesson3</i>	はからずも	
	ルツ記 2章1節～22節	7
<i>Lesson4</i>	ボアズの親切	
	ルツ記 2章8節～16節	9
<i>Lesson5</i>	買い戻しの権利	
	ルツ記 2章17節～23節	11
<i>Lesson6</i>	みないたします	
	ルツ記 3章1節～13節	13
<i>Lesson7</i>	待つという信仰	
	ルツ記 3章14節～18節	15
<i>Lesson8</i>	門の出来事	
	ルツ記 4章1節～12節	17
<i>Lesson9</i>	もう一人のゴーエール	
	ルツ記 4章13節～22節	19
おまけ	.....	21
おまけの使い方とあとがき	.....	32

## はじめに

皆さんはルツ記についてどのような印象を持っていますか？ルツ記というのは、旧約聖書の中でも、非常に親しまれてきた書物です。主人公のルツをはじめ、ナオミ、ボアズという登場人物は、非常に魅力的で、私たちに多くの信仰の示唆を与えます。しかも、彼らは、旧約聖書の人物の中では、私たちが親近感をいだくことのできる人物のように思えます。

また、ルツ記は全部でわずか4章しかなく、文体も平易です。さらに、ルツ記は私たちが直面する様々な問題(人間関係・死・結婚)を扱いながら、今日的なメッセージを語っているからです。姑のナオミと嫁ルツの物語は、たどえようもなく美しくスリリングで、ハッピーエンドのラスト・シーンは読みごたえ満点です。

ルツ記の著者は不明です。サムエルという説が保守的なキリスト教では考えられてきましたが、ルツ記の終わりにはダビデの系図が記されているので、サムエルの死後に書かれたと考えるべきでしょう。ヒゼキヤ説、ダビデ説、女性著者説などありますが、証拠はありません。最近ではナタン説というのが支持されています。しかし、これも決定的な裏付けがあるわけではありません。とにかく、ダビデ家に深い関心があった人物と思われる。

この書が書かれた目的は、ダビデの先祖がモアブ人ルツであることを示し、真の宗教は超国家的なものであり、一民族に制限されないということを示すためです。

ユダヤでは、ルツ記をペンテコステ(収穫祭)に朗読します。ちなみに、過越の祭では雅歌、プリムの祭ではエステル記、エルサレム滅亡の日には哀歌、仮庵の祭には伝道者の書を読みます。これらの5書をメギロースと言います。

それでは、ルツ記の世界を探訪しましょう。

## Lesson 1

---

# 10years

### ルツ記 1 章 1 節～5 節

---

Q 1. ルツ記の時代はいつの頃でしたか？それは、どんな世の中だったでしょうか？

\*さばきつかさとは士師のこと。士師記 21 章 25 節参照

Q 2. エリメレク一家に、どんな問題が起こりましたか？そして、どんな決断をしましたか？

Q 3. ユダヤ人にとって、モアブの地に住むということにはどんな問題があるのでしょうか？

Q 4. モアブに移り住んだエリメレク的生活や仕事、人間関係はどんなものであったか想像してみましょう。

Q5. 異邦の地で一家の主を失ったナオミと息子たちはどのような気持ちだったのでしょうか？

Q6. 二人の息子の結婚はナオミにとってどんな出来事だったでしょう？

Q7. 二人の息子も間もなく亡くなります。彼らの移住生活の過酷さを想像させます。残されたナオミの気持ちを想像してみましょう。

Q8. あなたが、ナオミのような立場であったら何を祈りますか？神様に何を伝えますか？

Q9. 混乱の時代、ききんに遭遇し、異邦の地で家族を失ったナオミの人生ですが、ルツ記はここから始まります。この10年間、ナオミと神様との関係はどのようなものだったと思いますか？

Q10. 10年間という歳月に私たちは様々なことを体験します。この10年間の予期しなかった出来事を、どのように受けとめ、乗り越えてきましたか？また、この先10年、どのような歩みをして行きたいと考えていますか？

## Lesson2

---

# ベツレヘムへ

## ルツ記 1 章 6 節～22 節

---

- Q 1. ナオミはモアブの野から帰る決心をしました。なぜですか？
- Q 2. しかし、途中でナオミは二人の嫁に自分の家に戻ることをすすめます。ナオミは二人の嫁の将来をどのように考えたのでしょうか？
- Q 3. 二人の嫁はナオミに対してどのような態度をとりましたか？このことから、これまでの彼らの生活や人間関係がどのようなものだったと想像できますか？
- Q 4. オルパはナオミの言葉に従って帰っていきました。このときのルツの気持ちを想像してみてください。
- Q 5. なぜ、ルツはオルパのように帰っていかなかったのでしょうか？

Q6. ルツの決心を聞いたナオミはなぜ何も言わなかったと思いますか？

Q7. 二人がベツレヘムに着いたときどのような反応がありましたか？

Q8. 20・21 節のナオミの言葉は神様の対する不平のように聞こえます。  
ナオミの真意はどんなものだったと思いますか？

Q9. 二人がベツレヘムに着いた時期はいつだったのでしょうか？

Q10. ルツにとってモアブに帰ることは住み慣れた地で新しい家庭を作り安定した生活を持つ可能性がありました。一方、ベツレヘムに行くということは、ナオミの死後に外国人でやもめとして一人で生きていかなければならない可能性があったわけです。けれども、ルツは何よりも聖書の神様を求めました。ルツのような選択に対してあなたならどう応じますか？

## Lesson3

---

# はからずも

## ルツ記 2 章 1 節～22 節

---

- Q1. ルツは、畑に落穂拾いに行きました。何のためでしょう？
- Q2. 落穂拾いに出かけるルツを見送るナオミの気持ちを想像してください。あなたならどんな気持ちになりますか？
- Q3. レビ記 19：9・10 を開きましょう。外国から来たルツにとって、旧約聖書に基づくイスラエルの習慣はどのように感じられたと思いますか？
- Q4. ルツはボアズの畑に行きました。なぜ、そこへ行ったと思いますか？
- Q5. ボアズと刈る者たちとの挨拶（2：4）から、ボアズのどんな人物像を想像しますか？また、この畑の雰囲気はどのようなものだと思いますか？

Q6. この挨拶を聞いたルツの気持ちを想像してみてください。あなたならどのような気持ちになりますか？

Q7. 世話係の若者は、短時間であったにもかかわらず、ルツのことを詳しく見ており好意的に評価しています。なぜだと思いますか？

Q8. KGK に来る学生は、ボアズの畑に来たルツのような気持ちを持つと思いますか？

Q9. はからずも、ボアズの畑に来たルツのような、神様の摂理を知った経験があれば証してください。

## Lesson4

---

# ボアズの親切

ルツ記 2 章 8 節～16 節

---

- Q 1. ボアズはルツにどのようなことを言いましたか？
- Q 2. ボアズの親切な言葉を聞いたルツはどのような態度をとりましたか？どのような気持ちだったのでしょうか？
- Q 3. ボアズが、ルツに親切なことしたのはなぜでしょう？
- Q 4. ルツがボアズの好意を素直に受けたのはなぜだと思いますか？
- Q 5. ルツは、「私が外国人であるのを知りながら、どうして親切にしてくださいるのですか？」とたずねました。この言葉はクリスチャンにとって「私が罪人であることを知りながら、どうして救いを与えてくださいるのですか？」という神様への問いに置き換えて考えられると思います。ボアズとルツの関係を考えながら、神様と私たちの関係を考えてみましょう。

Q6. 13節の「ねんごろに話しかけた」という言葉はヘブル語の特徴的な言い方で、直訳すると「心に語った」と言うことになります。神様が「心に語った」と思えるような経験がありますか？

## Lesson5

---

# 買い戻しの権利

ルツ 2 章 1 7 節～ 2 3 節

---

- Q 1. ルツが拾い集めた大麦はどれ程の量でしたか？
- Q 2. 大量の大麦を持ち帰ったルツを迎えたナオミは、何といましたか  
また、どのようなことを考えたでしょうか？
- Q 3. ルツの口から「ボアズ」の名前が出たときの、ナオミの心境はどの  
ようなものだったでしょうか？また、その理由は？
- Q 4. 「買い戻しの権利」とはどんな権利ですか？ナオミやルツにはどんな  
関係があるのでしょうか？
- Q 5. ルツの報告を聞いたナオミは、どんな指示を与えましたか？

Q6. 刈り入れが終わるまで、ボアズ、ルツ、ナオミはそれぞれどんな時間を過ごしたと思いますか？

Q7. ナオミは、これら一連の出来事を「恵みを惜しまれない主」の御手が背後にあったことを認めています。ナオミのように、恵みを惜しまれない神様の御手を感じたことがありますか？

## Lesson6

---

# みないたします

### ルツ記3章1節～13節

---

Q1. ナオミがルツに対して考えたことはどんなことでしたか？（1～4）

Q2. a.ルツはどのように答えましたか？（5）

b.それは、どんな気持ちだったでしょう？

Q3. a.ルツはナオミの考えに、どのように応じましたか？（6・7）

b.なぜ、そのようなことができたのでしょうか？

Q4. a.9節のルツの言葉にボアズはどのように答えましたか？

b.ボアズはルツをどのような女性であると評価していますか？

Q5. 12節で明らかにされた新事実はどんなことでしたか？

Q6. ボアズがルツに約束したことはどんなことでしたか？

Q7. 12節で聞いたことは、ルツにとって少なからずショックなことであつたと思います。しかしボアズは真実を伝えました。ボアズという人をどのように思いますか？また、ボアズの言葉を聞いたルツはどのような気持ちだったでしょう？

Q8. どうして、ボアズは「主は生きている」と言ったのでしょうか？

Q9. あなたは、結果が見えない状況で「主は生きている」と告白できますか？

## Lesson7

---

# 待つという信仰

ルツ記 3 章 14 節～18 節

---

- Q1. ボアズの打ち場に来たルツは夜が明けるとどのようにしましたか？
- Q2. なぜ、ボアズは「打ち場にこの女が来たことが知られてはならない」と思ったのでしょうか？
- Q3. ボアズはルツに大麦 6 杯を持たせました。これは 40kg にも相当する重さです。「打ち場に来たことを知られてはならない」と思ったボアズは、どうして証拠とも思えるようなお土産を持たせたのでしょうか？
- Q4. 家に戻ったルツはナオミに何を伝えましたか？

Q5. ナオミは話を聞き、どのように考えたでしょうか？

Q6. ナオミはルツに神様の導きを求めて積極的に行動することと、忍耐を持って待つという指示をしました。このことには、どのような大切なことと、また難しさがあるでしょうか？

Q7. 神様の導きを求めて積極的に行動することと、忍耐を持って待つという経験があれば分かち合ってください。

## 門の出来事

ルツ記 4 章 1 節～12 節

---

- Q 1. 3：18 でナオミは「あの方（ボアズ）は、きょうそのことを決めてしまわなければ、落ち着かないでしょうから。」と言いました。そのボアズはどこに行きましたか？ 何のためでしょう？
- Q 2. 2：2 は当時のユダヤの裁判の風景です。ボアズはどのようなことを申し出ましたか？
- Q 3. 買い戻しの権利のある人物は、「私が買い戻しましょう。」と即座に答えました。どうしてでしょう？
- Q 4. ボアズは、この答え（4 節）を予想していたのでしょうか？どのようなことを付け加えて伝えましたか？

- Q5. 買い戻しの権利のある人は、その願いを取り下げました。どうしてでしょう？
- Q6. 正式に、ボアズが買い戻しの権利のある者となったときに、門にいた人々と長老はどのようなことを言いましたか？ それはどのような意味があるでしょう？
- Q7. かつて、ナオミがルツの幸せを願ったときに、ルツがモアブの女であるということに悩みました。しかし、このとき、「モアブの女」であることが、ルツとボアズを結ぶ決定打となったのです。このような出来事を通して、神様とはどのような方だと思えますか？
- Q8. 買い戻しの優先権があった人は、辞退しました。この話は割に合わない話だったからです。しかし、ボアズは権利を実行する者となりました。その要因は何でしょう？
- Q9. 同じように、イエス様が私たちを贖ってくださったというのも、割に合わない話ではないでしょうか？ にもかかわらず、十字架で命を捨ててくださった、その要因は何でしょう？

## Lesson9

---

# もう一人のゴーエール

ルツ記 4 章 13 節～22 節

---

- Q1. 13 節には、ルツの結婚と出産のことが記されています。外国人(2:11)であり、はしため(2:13)のルツにとって、どんな意味のある出来事だったと思いますか？
- Q2. ルツにとってこのような未来はモアブを出発するときに想像できたでしょうか？
- Q3. 想像もしなかったことを神様が与えてくださったと言う経験がありますか？ そのことを話してみてください。そのような神様をどのような方だと思いますか？
- Q4. 14 節の「買い戻す者」とはオベデのことです。そのことにより、ナオミの未来にはどのような希望を持つことができたと思いますか？ 17 節で「ナオミに男の子が生まれた」と書かれています。このことも含めて考えてみましょう。

Q5. 「買い戻す者」(ゴーエール) とはナオミにとってどんな存在でしょう？

Q6. ルツ記の系図はダビデ王の祖先にモアブの女がいたことを明記するものです。同時にマタイの福音書の系図はメシアの祖先にモアブの女がいたことを明記するものです。この系図からどのようなメッセージを読み取りますか？

Q7. 買い戻す者であるボアズは、ルツにとって貧困からの救済だけではなく真実な愛をもってルツを妻として迎えました。買い戻す者であるオベデは、ナオミの生涯に平安を与える存在でした。そのオベデは嬰兒としてナオミに抱かれています。この出来事から、私たちとイエス様の関係について何を知ることができますか？

Q8. 買い戻す者(ゴーエール) とは「あがなう」という意味が含まれています。そしてオベデという名前は「仕える者」という意味です。ルツ記を通して、私たちはイエス・キリストについてどのようなことを学ぶことができましたか？

# おまけ

## Lesson1 10years

## ルツ記 1 章 1 節～5 節

「10年ひとむかし」といいますが、私たちは10年間というときの流れの中でさまざまな出来事を経験します。それは、まさに人生の縮図といえるのではないのでしょうか？ナオミたちが経験した約10年間の出来事を通じて私たちの人生について考えてみたいと思います。

### Q1.

さばきつかさとは士師のことである。日本でいえば縄文時代の中期あたりか？ヨシュア以降サムエルまで、士師(さばきつかさ)が民を指導、統治していた。しかし、士師記を読んだことのある人ならばお分かりだと思うが、士師記の後半は、事実上、士師が治めきれなくなっていた世相であった。ルツ記の時代はそのあたり。

### Q2.

ききんの原因は何か聖書には書かれていない。この地とはベツレヘムである。ベツレヘムとはヘブル語で「パンの家」という意味。アラビア語では Beit-Ram で「肉の家」という意味。前者は農産物の豊かさを思わせ、後者は牧畜の盛んな様子を想像させる。おおよそ食べることには困らないような地名であるが、この地は降水量が乏しく、乾燥地帯であり、数年連続の旱魃に見まわれたらひとたまりもない。(千代崎秀雄著『虹色の落ち穂』)また、イナゴの大群が発生することもある。(ヨエル2:25)しかし、士師時代であったことに注目すると、外敵による人為的なききんであったことが考えられる。

- ① ミデアン人は、イスラエルを7年間も圧迫し、その地も産物を荒らし、家畜のえささえ残らなかった。(士師記 6:1～5)
- ② 攻撃が波状的だった。
- ③ イスラエル全土が被害を受けた。(ガザに至るまで)  
ちなみに、ベツレヘムからモアブの野までは約 100 キロ。

### Q3.

モアブ人の拝む神は「ケモシュ」という名で知られている(民数記21:29など)。しかし有名なのは「バアル・ペオル」である。両者が同神別名か別神かは不明。後者については荒野の放浪のあと、カナン入国を目前にして、イスラエルの民はモアブの娘たちとみだらなことを始め、それが、バアル・ペオル礼拝と関連していたと言われる。

ペオルとは「開く」という意味で、結婚前の娘たちが、偶像礼拝行為の一部として祭司、もしくは一般の礼拝者と「みだらなこと」をすることをあらわしているとも考えられる。民数記25章の事件からもこの可能性は高い。

また、「モアブ」といえばユダヤ人たちにとってロトの娘たちのおぞましい出来事を連想する事だろう。姉娘の産んだ子は「モアブ」と名づけられた。それがモアブ人の先祖である。(創世記19:37)

### ルツ記★雑学

この家族の名前の意味を考えてみる。

エリメレク：「神は王である」との語意。このような名が付けられた背後には、父親の強い信仰的、政治的信念があったのではないか。

ナオミ：日本人にも多い名前？正しい発音は「ノオミィ」。この言葉の語根の意味は「快い・楽しい・愛らしい」から派生した「楽しみ・喜び」という意味。「甘い・甘味」という意味もある。

マフロン：「病弱・虚弱・弱い」(新聖書註解)確かに、早死にしたことを考えれば分かりやすいが我が子にこのような名を付ける親がいるだろうか？アラム語に出所を求めると「思いやりのある・柔和な・寛容な」という意味。日本名和男？

キルヨン：「消える・やつれる」という意味だが、マフロン同様に考えるなら「全きこと、完全無欠・完成」という意味。円満な人間にという意味が考えられる。日本名満夫。

## Lesson2 ベツレヘムへ

## ルツ記 1章6節～22節

「鮭」を食べたことのない日本人はほとんどいないでしょう。みなさんもご存じのように、鮭は産卵期になると産まれた川を目指して海から遡るのです。この現象を回帰移動と言います。

人間にも鮭に見られるような回帰移動があると言われていています。家を離れた時、実家や故郷が懐かしく思い出されるということは誰にでもあることでしょう。里心のない人はいません。Uターン現象や中国残留孤児が望郷の念にかられるのもこの現象です。

聖書にも回帰移動はいくつか出てきます。ヤコブはカランの地から20年振りに帰路につきました。放蕩息子も、ききんの末に父のもとに帰っていきました。

ナオミも、このとき生まれ故郷のベツレヘムへのホーム・カミングを決意しました。それは、ベツレヘムが地名通り「パンの家」になったからです。しかし、

ルツ記の記者はこの出来事を主の顧みによると捉えています。イスラエルの民がききんから解放されたということのみならず、ナオミがベツレヘムに帰るタイミングの全てが主の働きであったのです。

## Q8.

人間は、完全無欠ではないので、あのナオミにしてもやはり不信仰な態度を取ってしまう事もあり、聖書はそのような人の姿をそのまま描いている。そのような解釈もあるだろう。

しかし、ベツレヘムに帰ってくるなり愚痴をこぼし始めたなら、ついてきたルツは気持ちよくナオミに孝行を続ける事ができたのだろうか？その後のナオミやルツの姿を見ていくと、単にナオミの不信仰な姿をルツ記の記者が書き残したとするのは不自然な感じがする。

ナオミというのは(喜び・楽しみ・甘み)という意味であると前回記した。以下千代崎秀雄師の『虹色の落ち穂』(いのちのことば社)に興味深い解釈が書かれていたので紹介したい。

ベツレヘムに帰ってきた時、ナオミはすべての友人たちに「私をナオミと呼ばずにマラ(苦み・苦しみ)と呼んでください。」と言いました。言い換えるなら「私はお幸(おゆき)ではありません。お辛(おしん)です。」と。

ここには、ナオミのユーモアが表れているのです。ユーモアとは、自分を客観化できる心のゆとりから生まれます。つまりいて転んだとしても自分の姿をおかしく思えるのが心のゆとりです。自分の不幸を誰よりも自分が哀れがる心にはユーモアがありません。そういう人間は、周囲の人がさっぱり同情してくれないといってひがんだり、恨んだりするものです。反対に自分の不幸をユーモアある冗談で包んで、周囲の人を明るい気持ちにさせる人は、必ず不幸の底から立ち直って来るに違いないでしょう。

「わたしのことをおしんと呼んでね。」と言ってほほえむナオミを聖書は描いています。このような女性こそ「太陽」のような人といえるでしょう。「太陽のように明るい」(雅歌6:10)女性の魅力こそ、男性のみならず、女性からも支持されるのではないのでしょうか。もし、ナオミがグチばかりこぼしている陰気な女性だったらルツ記は生まれなかったでしょう。

### ルツ記★雑学

1:11 からのナオミの説明は、当時の習慣であるレピラート婚のことです。日本語では嫂婚(そうこん)制度と訳され、かつては日本でも似たような事が行われていたようです。この習慣は子どもなしに夫が死んだときに、その名を残すため、故人の未婚の弟が未亡人である嫂(あによめ)と結婚するというものです。サドカイ人がイエスをやり込めるために用意した質問(マタイ 22:23~28)もこれによります。しかし同じ説明をするにしても、ナオミのユーモア、人柄がにじんでいるようです。

今回からルツ記の学びは2章に入っていきます。いよいよこの章からルツ記のもう一人の主人公ボアズが登場します。そして、2章3節の「はからずも」という言葉がルツ記全体の重要な意味を持つ表現であることを心に留めながら読みすすめていきましょう。

## Q1

バツレヘムについたナオミたちにとって、大きな問題は「生計の道」だったに違いない。

ナオミは友人たちに「主は私を素手で帰された」(1:21)と言っているが、ほぼそのとおりだったであろう。二人の未亡人に財産などあるはずはない。

## Q3.

落ち穂拾い、と言うとミレーの名画を連想させ、牧歌的な、のどかで平和な情景を連想させるが、現実はそのなごのんびりしたものではなかったはずだ。これは、他に生きる道のない社会的弱者の救済であった。社会的弱者とは「みなしご・やもめ・貧しい者たち・在留異国人」のために収穫の時に畑の隅まで刈ることなく、一部を残すように、また、落ち穂を拾い集めないようにとモーセは命じている(レビ19:9～、申命記24:19～)。このような社会保障的・福祉的な規定が古代からあったということは感動的な驚きであるが、全ての畑の所有者がこれに従って寛大な態度をとったか、使用人たちが親切な態度をとったかは疑わしい。ルツが「私に親切にして下さる方」とあえて言っているところや、ボアズの言葉(8. 9. 15. 16節)からも、不親切な者や意地悪な人がけっこういたに違いない。落ち穂を拾う人たちを邪魔者扱いしたり、からかったり、叱ったり、恥ずかしい思いをさせたり、弱みにつけ込んだり、特にルツのような若い女の場合にはそのおそれがあることが余計にあったことだろう。

## Q7.

ボアズは見慣れないルツに目を止め(5節)、刈る者たちの世話をしている若者にルツの様子をたずねている。この「刈る者たちの世話をしている若者」という言葉は口語訳では「監督しているしもべ」と訳しており、こちらの方が原意にちかひであろう。彼はルツに対して非常に好意的な紹介をボアズにしている。短時間でもそのように感じさせる魅力がルツにあったのであろう。

## ルツ記★雑学

有力者(口語訳では裕福)ボアズが2章で紹介されている。持ち合わせている財産や地位から想像すると40～50歳くらいでは。白髪混じりの品の良いナイスミドルであったか、名前のように「ボアズ頭」だったかは不明。ちなみにカトリックのバルバロ神父が訳した聖書では「ボオズ」となっている。

## Q1.

確かにイスラエルには、在留異国人ややもめに対する社会福祉の制度としての落穂拾いがあった。制度が素晴らしいからといって、必ずしも素晴らしい社会になるわけではない。ボアズの言葉から、必ずしもすべての畑でこの事が大切され、弱者が守られていたわけではない様子を推察する事ができる。

水がめの水というのは、ボアズ家の雇い人たちのために、町の門にある井戸(Ⅱサムエル23章15節)から汲んでほるばる運んできたものである。よその人間が勝手に飲めるものではない。

## Q5.

旧約聖書を読むとき、この箇所がイエス・キリストについて何を教えているのか？という視点を失ってはならない。なぜなら、イエス様自身が「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。」と言われたからだ。(この聖書は当然、旧約聖書のこと)

旧約聖書には、イエス・キリストという言葉は一度も出てこない。しかし、旧約聖書をただ字義的に解釈するだけであるなら、それはユダヤ教のメッセージになってしまう危険性がある。

## ルツ記★雑学

ルツのお弁当はどんなものだったでしょうか。貧弱なものであったにちがひありません。そんなルツのお弁当を見てボアズは「このパンを食べなさい」とすすめています。おそらく、雇い人のために用意してあったパンの山を指してのことと思われます。「パン切れを酢に浸しなさい。」とあります。酢とは、ぶどう酒製造の副産物で、それに油を加えた、いわばドレッシングのようなもの、もしくは飲料ないし調味料のようなものようです。暑い時には、食事を口当たりの良いものにする効果もありました。入り麦は「大麦を炒り焦がし、ひいて粉としたもの。砂糖を混ぜて食べ、菓子材料ともする。」(広辞苑)ボアズがくれた入り麦は食べきれないほどの量でした。それは、ナオミのお土産になるほどに。

今回は、ルツ記の全体のキーワードと言える「ゴエル」というヘブル語が登場します。(新改訳では「買い戻しの権利」と訳されている)ルツの人柄やボアズの人柄に注目しながら「ゴエル」の本来の意味を探ってみましょう。

## Q1.

エパというのは元来、「かご」の意。1エパとは23リットルと新改訳聖書の欄外に説明がある。註解書の中には36リットルとするものもある。(『ルツ記注解』樋口信平著・新約社1969年) なぜ、こんなにたくさん拾えたかといえ、2:16にあるとおり。

## Q2.

ナオミはルツの収穫を見て「どこで」働いたかを聞いた。そして、ナオミの質問は「だれに」にいき着いた。物の背後に人を認めることができる人は幸いであると樋口信平師は『ルツ記注解』で記している。

## Q4.

イスラエルの律法のひとつ。だれかがおちぶれて、貧しさの極みにある地所や、自分自身をも売り払い、借金を返済しなければならないときがある。そのようなときに、遠い親戚では無理であるが、近い親戚がお金を出して、売られた地所や、本人を買い戻す義務がある。

ゴエルとは直訳すれば「贖う人」という意味であり、原語はガーアル(贖う)ということである。このゴエルという言葉こそ、ルツ記のメッセージを正しくみ取るカギである。ルツ記はボアズがゴエルであるということを述べている。それと同時に、ボアズの姿を通して、贖い主なるお方を示している。

## Q1.

聖書学者の中には、ルツは美人ではなかったので色仕掛けを使おうとしたと解するものがあるが(新聖書註解・旧約2)根拠もなく、個人的には支持できない。

むしろ、当時の求婚の習慣であったのではないだろうか？また、買い戻しの権利のある者に対して、その権利を行使して欲しいとのお願いの行為であったかもしれない(もちろん求婚の意を含む)。こちらも根拠はなく、この習慣が、どれくらいの時期にどの程度の地理的範囲で行われていたのかはわからないが、ナオミの指示やボアズの応答から、そのような習慣

であったと考える事は不自然ではない。

## Q2.

風俗・習慣の違いというのは難しいものだ。ある文化では美しいとされる事が、ある文化では忌まわしいとされることさえある。イスラエルの中では、このような習慣が通用していたかもしれないが、モアブ人のルツにはなじみのないものだったかもしれない。もちろん、ナオミはルツに丁寧に説明した事だろう。ルツも説明を聞いて納得したに違いない。しかし、理屈では納得できたとしても、感情的な抵抗というものは簡単には拭い去れないものである。ルツにとってはモアブの偶像崇拜にまつわるみだらな宗教行為から救われたという感謝の思いが強かったであろう。その感謝が大きければ大きいほど、ナオミの指示に対する心情的な拒絶の思いも強かったはずだ。

## Q3.

今回のタイトルにもした「みないたします」という言葉は、ルツ記の中でも印象深い言葉の一つである。もちろん、直接的にはナオミに語った言葉であるが、同時に、主にたいする信仰告白の言葉と理解して間違いあるまい。

## Q4a.

「先の真実」「あとからの真実」とは何か？真実と訳されている言葉はヘブル語で「ヘセド」であり、「愛、親切、善意、忠実、誠実、真心」など多様な意味を持つ。「先のヘセド」とは、亡き夫への愛です。そのために故郷のモアブを離れ、義母のナオミに献身的に仕えてきたということである。そして「あとからのヘセド」とは、まさに、いま、ルツがボアズにプロポーズする事によりエリメレクの家名を絶やさないようにするという、亡き夫へのヘセドの最終的な形である。このことを放棄するなら、ルツは自由に結婚する事ができた。「貧しいものでも、富むものでも、若い男たちのあとを追わなかった」というボアズの言葉は、ベツレヘムの町の男たちがルツの魅力に気がつき始め、それが少し表面化してきて来た様子を想像させる。

## b.

「しっかりした」と訳されている「ハイル」という言葉は多様な意味を持つ言葉で「精神的、道徳的、さらに、経済的にしっかりした」という意味を持つ。人格的にも知的にもルツは弱々しい女性ではなかった。

「町の人々」とは直訳すると「わが民の門はみな」となり、門のところで法的な取り決めに携わる長老たち(4:2)を指す。人生経験をつんで、見る目を持った人たちからルツは評価されていた。同時に、これは町の人々の口を借りたボアズの愛の告白と考えるのは読み込みすぎだろうか？

ルツとボアズが結ばれようとしていたときに、ボアズよりも優先権のある買戻しの権利を持つ親族がいるという新事実が明かされるといのが、前回は学んだことでした。もし、ボアズが優先順位を無視して勝手な行動をとったなら相手の顔をつぶすだけでなく、共同体の法を踏みにじることになります。その結果、いのちさえ失いかねないというのが当時のユダヤ社会です。情熱に押し流されて行動することを美化するのが今の世相かもしれません。しかし、情熱のおもむくままに突っ走ることは、案外やさしいものです。むしろ、情熱を制御し、冷静に行動することが難しいのではないのでしょうか。「理性・良心・良識」などといっても、フルスピードの情熱に対してはなんとも頼りないブレーキです。暴走する私たちの情熱を制することのできるお方は聖霊のみ。聖霊に支配される人だけです。ルツもボアズも主を恐れる信仰によって、冷静沈着にこの場面でふるまうことができたのです。自分の感情によってではなく、全てを知り、支配し委ねるもののために最善をなして下さる主を信じる信仰者とさせていただきたいものです。

## Q2.

この求婚が当時の習慣であるなら、なぜ、ルツが来た事をボアズは隠そうとしたのだろうか？ミシュナというユダヤ教の口伝律法の中に興味深い条項が記されている。それは、異邦人と関係を持ったと疑われた男性はその女性とラビラート婚を行う事ができないというものである。ミシュナはルツの時代よりも後代のもの(紀元200年くらい)だが、このようなことが律法に組みこまれていることは、かなりの昔から口伝として受け継がれてきた可能性がある。ボアズは、その日進めようとしている、買戻しの権利の行使の手続きが複雑にならないように細心の注意を払った。

## Q3.

これは、ナオミに対するメッセージをこめた贈り物。ルツから伝わる事が真実であるとのメッセージと同時に、約束を果たすという一種の「手付金」の意味合いがあるのでは？

## Q4.

16節の「娘よ、どうでしたか。」という言葉は、直訳すると「私の娘よ、あなたは誰ですか？」となる。まだ暗いうちであったが、こんな時間に帰ってくるのはルツしかおらず、「私の娘」といいつつ「誰かわからない」ほど、ナオミはモーロクしていないだろう。この言葉の真意は「求婚に行った私の娘よ。結果はどうになりましたか？どのような立場であなたはいま戻って来ましたか？」という意。ルツの答えは、その答え。

求婚を指示したあとの、ナオミの指示は「待っていなさい」ということでした。ナオミ、ルツ、ボアズが、なすべき責任を果たしたのなら後の結果は主にゆだねて待つ。このことをルツ記の出来事は私たちに教えているのではないのでしょうか。

## Lesson8 門の出来事

## ルツ記4章1節～12節

---

ルツの幸せを願うナオミにとって、ルツが「モアブの女」であったことが最大の障害でした。しかし、ルツが「モアブの女」であることによって、逆転のドラマが生まれるのです。繰り返し「モアブの女」とルツを紹介する、ルツ記著者の文学的才能を垣間見る事ができます。

### Q2.

「エリメクの畑を売ろうとしている。」(4:3)はこれから土地を売るというニュアンスである。しかし、ナオミたちに今から売ろうとする土地などあったのだろうか？もし、あるのだったらルツは落ち穂拾いになど行かなくて良かったのではないかと考えると、土地は、10年前にモアブに旅立つときに売り払い、第三者の手に渡っていると考えるのが自然ではないだろうか？そして、それを買い戻す資力はナオミにはないので、ルツを通してボアズに依頼させたと思われる。

### Q3.

すでに、日本の土地神話も崩壊した感があるが、土地売買を日本のように考えると、このところでは誤解が生じる。イスラエルでは「土地神有」思想が根底にあり、人間に与えられているのは使用権である。土地は50年ごとにめぐってくる、ヨベルの年には無償で元の所有者に戻されなければならない(レビ27:24)。

したがって、土地の価値はヨベルの年までの年数によって決まる。厳密には土地を売るのではなく、収穫の回数売るのである。つまり、エリメクの土地は、10年前に売ったときよりも10回の収穫分だけ安くなっていることになる。

しかも、エリメクには相続人もおらず、年老いたナオミに子どもが生まれる可能性などほとんどない。だからヨベルの年になっても、土地相続のことは問題にならず、この土地を息子に残す事ができる。この投資は損ではない。そして、ゴエルとしての責任を果たす事によって親族の間でも名を高められる。このような考えがあったと推測できる。

### Q5.

リビングバイブルによれば「そんなことなら、おりるよ。生まれてくる子にまで財産をわけてやるなんて、そりゃ困る。あんたが買ってくれ。」(4:6)と意識されている。

Q6.

ボアズとルツに多くの子どもが与えられて、ヤコブ、ラケル、レア、ペレツのように繁栄するようとの願い。

Q8.

そもそも、ゴエルとして立ち上がるというのは割に合わない話である。それを感じさせない要因があるとすれば、それは愛である。ルツへの愛である。

#### ルツ記★雑学

4:1でボアズは買戻しの権利の優先権を持っている人物に「ああ、もしもし」と呼びかけています。しかし、ボアズがこの親戚の名前を知らなかったとは考えられません。ゴエルとして立ち上がらなかった者の名など書き記すに値しないと考えたのか、名を明かす事によって子孫が恥をかくことがないように配慮したのか？ ルツ記筆者の武士の情けを垣間見る事ができます。

### Lesson9 もう一人のゴーエール ルツ記4章13節～22節

---

ルツ記は単なる一篇のロマンスではありません。この書が記された一つの目的は、ダビデ王の先祖にこのような人々がいたという事を伝える事なのです。

Q4.

17節の言葉から、オベデがナオミの養子となったと解する聖書学者もいる。ゴエルとは、ただ単に金を出して財産を回復させてくれる人であるだけでなく、生涯そのものを取り戻してくれる人である。ボアズは力強い支えではあるが、ナオミに比べてそれほど若いわけではない。ナオミが老年を迎える頃、オベデこそがゴエルとなりえたのである。

Q6.

ダビデ王朝やダビデ王個人を神聖視する風潮が、その王国内にあったことだろう。旧約聖書はたしかにダビデとその王朝が神に選ばれていた事を伝えている。しかし、それはダビデの信仰のゆえであって、その家柄や血統ではないことをルツ記は証言する。

人間はとかく家柄や血統の高貴さを盲信しやすい。だが血統から言えば、ルツにはイスラエル人が忌み嫌っているモアブ人の血が流れているというショッキングな事実を、ルツ記は明らかにする。いわば血統という偶像を倒し、その迷信を破壊する役割を果たす。

### Q7.

イザヤ書では、主なる神こそ、贖い主(ゴエル)であるという信仰告白を見る事ができる。イスラエルが、バビロンの捕囚となったのを贖いだし、その身分、いのちを回復し、彼らの老年にいたるまで養い背負ってくださるお方(イザヤ46:4)として主は自らを示しておられる。

そして、その主は嬰兒として世に来られると預言したのもイザヤである。(イザヤ9:6)ここにオベデ的ゴエルとしてのキリストを見る事ができる。

### Q8.

オベデは、母ルツの姿勢から多くのことを学んだに違いない。姑によく仕え、ボアズの妻となってからは夫に良く仕えた事であろう。そのルツにならってオベデも、ルツやボアズ、そしてナオミに仕える人となったのではないか。

しかしそれ以上に、神のあり方を捨てて人となり、十字架につけられるまでに仕えられたゴエルなるメシア、キリストに注目してルツ記の学びをまとめたい。

## おまけの使い方とあとがき

今回のルツ記聖研のテキストには、「おまけ」という付録をつけました。これは従来の「司会者の手引き」に準ずるものと言えますが、司会者の手引きほど親切に説明はされていません。

種明かしをすると、私の説教メモの一部なので、解釈に主観が入りすぎている部分もあります。ですからこの「おまけ」に書かれていることを答えとして鵜呑みにすることなく、参考程度に活用してください。

やや註解的な説明も付記されていますが、是非、学ばれる方はいくつかの註解書を開きながら、理解を深めてください。私自身、学生時代のKGKの聖書研究会で、註解書というものに初めてさわりました。それは本当に刺激的な経験でした。世の中にこんな本があるのかと感動しました。そして何種類もあることに驚きました。さらに、同じ箇所であるのに、註解者によってコメントがまったく違う事も衝撃でした。ここからは注意が必要ではありますが、註解書の中から、いったいどの解釈が正しいのか、自分の聖書理解、信仰の立場はどこにあるのかと見極める力を養う経験をして欲しいと思います。

しかし何よりも、聖書本文に注目してください。特にルツ記は4章と短い書物ですから、司会者に限らず、参加者はルツ記全体を読んで聖研に備えることができれば幸いと思います。このテキストは一応9回シリーズですから、最低でも9回はルツ記を通読してください。せっかくですからキリ良く10回は通読してください。

この4章という短い中に、驚くほど多くの発見があるでしょう。そして、学ぶ前よりも、ルツ記に親しみ、ルツ記を好きになってくだされば、このテキストとしては十分に役割を果たせた事になると思います。

KGK 主事

吉澤恵一郎

## 参考文献

新聖書注解 旧約2 (いのちのことば社)

ルツ記物語 虹色の落ち穂

千代崎 秀雄著(いのちのことば社)

ルツ記注解 樋口 信平著 (新約社)

ルツ記講解説教 系図に輝く星

樋口 信平著 (一粒社)

## ルツ記の学び～ゴエル

---

発行日 2005年8月6日初版

著者 吉澤恵一郎

発行者 キリスト者学生会

〒101-0062

東京都千代田区神田駿河台 2-1

OCCビル内

tel.03-3294-6916

fax.03-3294-6050

e-mail [office@kgkjapan.net](mailto:office@kgkjapan.net)

---

**KGK**  
学生干部者  
学生会